

軽妙洒脱の俳人、横井也有について

横井也有は、江戸時代に活躍した尾張の俳人です。

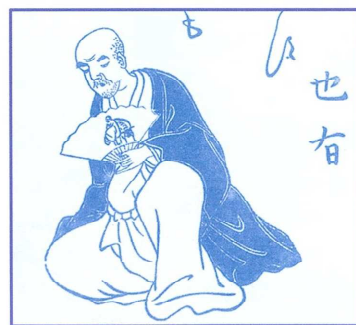
也有（本名は横井孫右衛門時般^{まごえもんときつら}）は、赤穂浪士の仇討ちがあった元禄15年（1702年）に、藤ヶ瀬横井家六代横井時衡の長男として生まれました。通称は孫右衛門、幼名は辰之丞。

藤ヶ瀬横井家は、鎌倉幕府の執権北条氏の流れをくむ名門で、歴代、藤ヶ瀬（現在の愛西市藤ヶ瀬町）を中心に領し、名古屋に居住していました。

也有は、1727年（享保12年）、26歳で家督を継ぎ、以降、御用人、大番頭、寺社奉行など、尾張藩の重臣として要職を歴任し、徳川継友、宗春、宗勝の三人の主君に仕えました。武芸に優れ、儒学などの学問も究め、その一方で、若い頃から俳人としても活躍しました。

宝暦4年（1754年）に53歳で職を辞し、83歳で亡くなるまで、前津（現在の名古屋市中区前津）の草庵・知雨亭に隠棲し、俳句や漢詩、和歌、狂歌、茶道など、風雅の世界に没頭しました。

也有の数多くの作品の中でも最も有名な「鶉衣」は、也有の死後、熱狂的なファンであった太田南畝によって刊行され、也有の作品を世の中に広めるきっかけとなりました。也有の俳文は、芭蕉やその門人とは違った俳味があふれ、軽妙洒脱で機知に富んだ温かなまなざしを身のまわりに注いでいます。「俗」の中に「雅」を見いだす「遊文派」ともいうべき俳文の一潮流を確立しました。



隠居して風流を楽しむ
也有翁

短夜やわれにはなかきゆめ覚ぬ

辞世の句

短い夜であったが、自分にとっては実に長い夢から覚めたような思いであるという辞世の句は、短い人生なのに、長い夢を見ることができて幸せだったという思いがこめられています。